

2 哺乳類

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

1. 三重県の哺乳類相

三重県に生息する陸産哺乳類については、「三重県レッドリスト（2005年版）」策定時点では在来種として42種の記録があった。その内訳は、食虫（モグラ）目8種、翼手（コウモリ）目11種、霊長（サル）目1種、食肉（ネコ）目8種、偶蹄（ウシ）目3種、齧歯（ネズミ）目10種および兎（ウサギ）目1種であり、中央アルプス以北の山岳地帯に分布するオコジョや捕獲調査の進んでいないコウモリ類の一部等を除き、本州に分布するほとんどの種の生息が確認されている。

これらには、国内ですでに絶滅したとされるオオカミとカワウソも含まれている。両種とも県内産の標本は残されていないものの、オオカミについては各地に伝承が残ることに加え、内務省博物館の調査記録に現在の紀北町で死体を得た旨の記載があり、カワウソについては1920年代までは生息していたことが狩猟統計から読み取れる。

その後、県内でも哺乳類相に関する調査が少しずつ進められ、2006年に紀北町でヒメホオヒゲコウモリ、2013年に津市でヤマコウモリが初めて確認された。

また、外来種については8種の生息が確認されている。家ネズミ類（クマネズミ、ドブネズミおよびハツカネズミ）が県内に広く分布するほか、戦後、国内に侵入した、あるいは移入されたシベリアイタチ（チョウセンイタチ）とヌートリアが生息する。前者は県南部を除く地域の平野部に、後者は主として北勢地方と伊賀地方の河川周辺に生息する。また、2000年以降に初めて県内で確認されたアライグマとハクビシンも分布を急激に広げており、農作物被害も顕在化している。さらに、鈴鹿山系御池岳周辺にはシマリスが生息しているが、生息実態は不明である。

一方、海産哺乳類のうちクジラ目について、伊勢湾では、定住する唯一の種であるスナメリを含めて19種の記録がある。食肉目については、国内で絶滅したニホンアシカがかつて本県にも生息していたことを示す記録があるほか、漂着したと思われる5種も県内各地の海岸で記録されている。

2. 調査の概要

今回のレッドリスト改訂にともない、三重県で記録のあるすべての陸産哺乳類の中からシントウトガリネズミ、カワネズミ、ヒメヒミズ、ミズラモグラ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ、ツキノワグマ、オオカミ、カワウソ、ニホンリス、ニホンモモンガ、ヤチネズミ、ヤマネおよびカモシカの24種、海産哺乳類の中からニホンアシカとスナメリを評価対象とした。

調査については、哺乳・爬虫・両生類専門部会の委員が、「三重県レッドリスト（2005年版）」以降に公表された哺乳類に関する文献を収集し、評価対象に関する情報を整理した。また、各委員がそれぞれ専門とする分類群の生息地に出向き、現地調査を実施した。さらに、楊枝川上流域（熊野市紀和町）、法花湿原（伊賀市法花）および河合川上流域（伊賀市阿山町榎山）で三重県レッドデータブック改訂委員会の合同調査を実施した。

得られた資料を過去の知見に加え、三重県レッドリストカテゴリー分類ルールに従って新しいランクを決定した。しかしながら、個体群サイズやその動態についてある程度の評価ができたのは、絶滅種3種を除き、オヒキコウモリ、ツキノワグマ、カモシカおよびスナメリのみであり、ほとんどの種については「三重県レッドリスト（2005年版）」策定時と同様に、主として出現範囲、生息地点数、生息地の分断傾向、人為圧力等をもとに評価せざるを得なかった。

3. 絶滅危惧種の概要

今回、レッドリストから除外された種は、ミズラモグラ、キクガシラコウモリ、モモジロコウモリおよびモリアブラコウモリである。前出3種については、県内に広く分布し、新たに生息地が見つかったことに加え、個体数の減少傾向も見られないことから、低懸念（LC）と評価した。また、モリアブラコウモリは前回、情報不足（DD）とされたものの、県内での記録がないため、今回は評価の対象外とした。

また、ノレンコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ニホンモモンガ、コキクガシラコウモリ、テングコウモリおよびヤマネについても、生息地点数が増えて出現範囲が拡大したこと等を反映し、そのランクを下げた。

これらについては、生息域の拡大や個体数の増加があったというより、分布実態の解明に取り組んだ調査の成果と考えられる。

一方、今回の改訂でランクを上げたのは、オヒキコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリおよびカモシカの3種である。オヒキコウモリについては、本県には生息地はなく、過去2例の捕獲記録は偶然に迷行した個体であると考えられてきたが、2005年に熊野灘沖の無人島が全国でも数か所しか知られていない集団生息地で

あることがわかった。ヒメホオヒゲコウモリについては、これまで県境を接する奈良県大台ヶ原で記録があるものの、本県での確認記録はなかったが、新たに生息場所が確認された。このことから、両種とも情報不足から絶滅危惧IB類に変更した。カモシカについては、生息域が重なり、餌資源についても競合関係にあるニホンジカの増加により、主要な生息地における個体数の減少が顕著として、ランクを絶滅危惧II類に上げた。

ランクに変更はなかったものの、ヤマコウモリの集団生息地が確認されたことも注目される。本種のねぐらの発見は近畿地方で初めてであり、現在、西日本で確認されている数少ない生息地として保全するとともに、今後の生息実態の解明が待たれる。

これら絶滅危惧種にとって、最大の脅威が森林伐採や大規模な開発行為にともなう生息環境の改変であることはいうまでもないが、ここではさらに3つの要因を指摘しておきたい。まずは、1990年代以降に急増したニホンジカの被害による植生改変である。その影響は本県でも一層、深刻さを増しており、前述のとおりカモシカへの影響が顕在化し、大台ヶ原周辺に生息するシントウトガリネズミや森林性コウモリの生息地も破壊された。

また、外来種については、絶滅危惧種への直接的な影響を確認することはできなかったが、アライグマやハクビシンは洞穴や樹洞に住み着くことがあり、ニホンモンガやヤマネ、コウモリ類への影響が懸念される。

さらに、県内で増設が相次ぐ風力発電施設において、衝突死したと推測されるヒナコウモリの死体が2010年に回収された。鳥類を含めた絶滅危惧種への新たな脅威として影響を調査すべきであろう。

主な参考文献

- 古田正美. 2005. 伊勢湾周辺に迷入・漂着した鯨類と鰭脚類の紹介. 三重動物学会報, 28: 4-5.
- 三重県. 1996. 三重県史 別編自然. 三重県, 津, 748 pp.
- 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会. 2010. 紀伊山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書 平成20・21年度. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会, 津・奈良・和歌山, 219 pp.
- 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会. 2008. 平成18・19年度鈴鹿山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書. 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会, 津・大津, 107 pp.
- 佐野 明. 2014. 三重県で初めて確認されたヤマコウモリとそのねぐら. 三重自然誌, 14: 29-30.
- 佐野 明・清水善吉・佐野順子・山本輝正. 2006. 紀伊半島からのオヒキコウモリ生息地の初記録. 紀伊半島の野生動物, 8: 3-5.
- 清水善吉. 2006. 哺乳類. 三重県レッドデータブック2005動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), pp. 43-45. (財)三重県環境保全事業団, 津.
- 清水善吉. 2007. 三重県におけるヒメホオヒゲコウモリの初記録, 三重自然誌, 11: 127-128.
- 富田靖男. 1979. 三重県の哺乳動物相. 三重県立博物館研究報告自然科学, 1: 5-68.
- 富田靖男. 2000. 三重県の陸産哺乳類 (II). 三重県環境保全事業団研究報告, 6: 23-47.

(佐野 明)

除外種

「三重県レッドデータブック2005 動物」掲載種のうち、今回の改訂により低懸念（LC）と判定された種、及び評価対象から除外した種とその理由は以下のとおりである。

(表2-1) 改訂により低懸念（LC）となった種

No.	目名	科名	和名	改訂前 県ランク	除外理由
1	食虫	モグラ	ミズラモグラ	VU	県内に広く分布し、新たに生息地が見つかったことに加え、個体数の減少傾向も見られないため。
2	翼手	キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	NT	県内に広く分布し、新たに生息地が見つかったことに加え、個体数の減少傾向も見られないため。
3	翼手	ヒナコウモリ	モモジロコウモリ	NT	県内に広く分布し、新たに生息地が見つかったことに加え、個体数の減少傾向も見られないため。

(表2-2) 改訂において評価の対象から除外した種

No.	目名	科名	和名	改訂前 県ランク	除外理由
1	翼手	ヒナコウモリ	モリアブラコウモリ	DD	県内での記録がないため、今回は評価の対象外とした。

哺乳類レッドリスト

絶滅 (EX)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
食肉	イヌ	オオカミ	<i>Canis lupus</i>	EX	37
食肉	イタチ	カワウソ	<i>Lutra lutra</i>	EX	37
食肉	アシカ	ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	CR	37

絶滅危惧IA類 (CR)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
食虫	トガリネズミ	シントウトガリネズミ	<i>Sorex shinto</i>		38

絶滅危惧IB類 (EN)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
翼手	ヒナコウモリ	ヒメホオヒゲコウモリ	<i>Myotis ikonnikovi</i>		38
翼手	オヒキコウモリ	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i>	VU	39
食肉	クマ	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i>	LP	39

絶滅危惧II類 (VU)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
食虫	トガリネズミ	ニホンカワネズミ	<i>Chimarroale platycephala</i>		40
食虫	モグラ	ヒメヒミズ	<i>Dymecodon pilirostris</i>		40
翼手	ヒナコウモリ	ノレンコウモリ	<i>Myotis nattereri</i>	VU	41
翼手	ヒナコウモリ	ニホンウサギコウモリ	<i>Plecotus sacrimontis</i>		41
齧歯	リス	ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>		41
齧歯	ネズミ	ヤチネズミ	<i>Eothenomys andersoni</i>		42
偶蹄	ウシ	カモシカ	<i>Capricornis crispus</i>		42
クジラ	ネズミイルカ	スナメリ	<i>Neophocaena asiaeorientalis</i>		42

準絶滅危惧 (NT)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
翼手	キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>		43
翼手	ヒナコウモリ	ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>		43
翼手	ヒナコウモリ	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>		43
齧歯	リス	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>		44
齧歯	ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>		44

情報不足 (DD)

目名	科名	和名	学名	環境省	掲載P.
翼手	ヒナコウモリ	コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i>		44
翼手	ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>	VU	44
翼手	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i>		44

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EW
EW
CR
EN
VU
NT
DD

哺乳類レッドリスト 新旧対照表

本書に掲載された哺乳類レッドリスト（改訂後のカテゴリー）と「三重県レッドデータブック2005」に掲載した哺乳類レッドリスト（改訂前のカテゴリー）との新旧対照表は以下のとおりである。

	改訂前のカテゴリー						種数	
	EX	CR	EN	VU	NT	DD		
改訂後のカテゴリー	EX	オオカミ カワウソ ニホンアシカ						3
	CR		シントウトガリネズミ					1
	EN			ツキノワグマ			ヒメホオヒゲコウモリ オヒキコウモリ	3
	VU		ノレンコウモリ	ニホンウサギコウモリ ニホンモモンガ	カワネズミ ヒメヒミズ ヤチネズミ スナメリ	カモシカ		8
	NT				コキクガシラコウモリ テングコウモリ ヤマネ	ユビナガコウモリ ニホンリス		5
	DD						コテングコウモリ ヤマコウモリ ヒナコウモリ	3
	リスト外				ミズラモグラ	キクガシラコウモリ モモジロコウモリ	モリアブラコウモリ	4
	種数	3	2	3	8	5	6	

オオカミ <i>Canis lupus</i> Linnaeus, 1758	食肉目イヌ科	三重県：絶滅 (EX) 旧県：絶滅 (EX)	環境省：EX
--	--------	---------------------------	--------

選定理由： 日本産亜種は1905年1月に奈良県吉野郡東吉野村小川（当時の鷲家口）においてM. P. Andersonにより取得された若い雄（ロンドン自然史博物館で収蔵）を最後にその後の正式な記録がなく、絶滅したものと推定される。

種の概要： 日本産は大陸産より小型で、頭胴長100 cm内外、尾長30 cm内外、体、吻部ともイヌと比べて細身である。

分布： 種はユーラシア大陸および北アメリカの中北部に分布。亜種エゾオオカミ *Canis lupus hattai* Kishida, 1931は北海道（1900年前後頃に絶滅）に、亜種ニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839は本州、四国、九州に分布していた。

現況・減少要因： 県内にはオオカミに関する標本あるいは出土遺物など、データを伴う資料は現在のところ見あたらない。古文獻としては、内務省博物館（現東京国立博物館）の田代安定が動植物調査のために専門家5人で紀州を一周した時の「明治十年紀州紀行」に、1877年6月6日に現北牟婁郡紀北町海山区矢口浦の山中で撲殺されたオオカミ1頭を本館に陳列する目的で取得した、との記述が認められるが、この個体についてのその後の所在は不明のようであり、裏付資料の調査が待たれる。減少要因としてはヒトによる駆除も含めた捕殺、山林開発や狩猟などによる餌動物の減少、イヌ伝染病ジステンパーの流行、あるいはこれらの複合作用など諸説がある。

特記事項： ニホンオオカミ *Canis hodophilax* を独立種とする見解もある。

文献： 1. 2. 73.

(富田靖男)

カワウソ <i>Lutra lutra</i> (Linnaeus, 1758)	食肉目イタチ科	三重県：絶滅 (EX) 旧県：絶滅 (EX)	環境省：EX
--	---------	---------------------------	--------

選定理由： 日本各地に広く生息していたが、1979年に高知県で目撃されたのを最後に、確実な記録がない。三重県では狩猟統計による1924年の捕獲情報以降正式な記録がない。

種の概要： 河川中流から河口部および沿岸に生息する水生食肉性哺乳類。頭胴長65 cm内外、尾長45 cm内外で、尾の付け根は太く、先端に向かって次第に細くなる。四肢の指の間には水かきが発達している。

分布： ユーラシア大陸および北アフリカに広く分布。国内ではかつては北海道、本州、四国、九州に分布していた。

現況・減少要因： 県内各地方の郷土教育資料などによると県内にもかつては広く生息していたものと思われるが、1900年代に入ってから減少が加速したものと推察される。減少が著しいことから1928年に狩猟獣から除外されたが、それ以前数年の農林省の狩猟統計によると、三重県では1923年3頭、1924年13頭で、それ以降の記録はない。狩猟統計の数字については色々問題も指摘されるが、一応の目安とすると、1920年代頃までは県内にも若干生息していたものと推定されるが、狩猟獣から除外以降の確実な記録がなく、絶滅の年代は明らかでない。減少要因としては毛皮を目的とした過度の捕獲、生息環境の変化などが想定される。

特記事項： 本州以南の個体群は亜種ニホンカワウソ *Lutra lutra nippon* Imaizumi et Yoshiyukiとされているが、独立種 *Lutra nippon* とする見解もある。

文献： 2. 80.

(富田靖男)

ニホンアシカ <i>Zalophus japonicus</i> (Peters, 1866)	食肉目アシカ科	三重県：絶滅 (EX) 旧県：絶滅 (EX)	環境省：CR
---	---------	---------------------------	--------

選定理由： 日本沿岸にはかつては生息・繁殖地が点在していたが、1974年に北海道礼文島金田ノ岬沖で幼獣1頭が捕獲、1975年に島根県竹島で目撃されて以降、捕獲、目撃記録がない。三重県では100年以上記録がない。

種の概要： 体長雄240 cm内外、雌180 cm内外。日本近海の個体群はカリフォルニアアシカ *Zalophus californianus* (Lesson, 1828) の亜種ニホンアシカ *Z. c. japonicus* とされていたが、近年独立種とする見解が出された。

分布： 国外では千島列島、サハリン南部、国内では北海道、本州、四国、九州などの周辺海域に分布していた。伊豆諸島や島根県竹島はかつての繁殖地として知られる。

現況・減少要因： 三重県には捕獲資料および遺跡出土遺物など、データを伴う資料は現在のところ見当たらない。しかしながら1800年代後半の古文獻、大日本水産会が北牟婁郡尾鷲浦（現尾鷲市）の会員との間で交わしている「大日本水産会報告」の質疑応答欄には、櫻井平八が水産会の質疑に対して回答している『海獣諸件』（同報告74）および土井幹夫の『海驢の件質問』と、山本由方のそれについての回答2件の海獣類に関する報告が認められる。これらの記述による海獣の特徴はアシカと合致するものであり、「当北牟婁部の如き冬季瘦近海に來たり岩礁上に上りて遊ぶを見る 然るに此一兩年は絶えて來ることなし」と述べていることから、尾鷲地域には少なくとも1880年代頃までは生息していたものと推察される。過度の捕殺等により消滅した。

文献： 2. 5. 16. 17. 18. 30.

(富田靖男)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

シントウトガリネズミ

食虫目トガリネズミ科

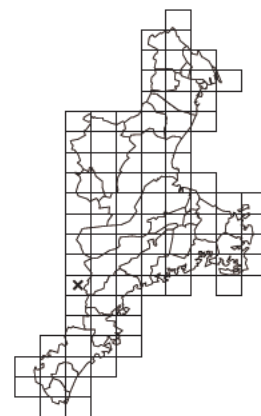
三重県：絶滅危惧IA類 (CR)

環境省：—

Sorex shinto Thomas, 1905

旧県：絶滅危惧IA類 (CR)

選定理由： 大台ヶ原1地点でのみ生息が記録されているが、1984年を最後に確認がない。
種の概要： 頭胴長52~78 mm, 尾長40~55 mm, 体重3.9~13.5 g. 地表の落葉層、
 蘚苔類層中やモグラのトンネルなどを利用して行動し、ミミズや昆虫を採餌している。
分布： 本州の紀伊半島、京都府以北の山地、佐渡島、四国の山地に分布する日本固有種。県内では、大台町（大台ヶ原の正木嶺）で記録がある。
現況・減少要因： 大台ヶ原では、奈良県側を含めても最近25年間は生息情報がない。
 寒冷期の遺存種とされており、高山山岳地帯のない本県においては、もともと分布域は
 限定されていた。唯一の生息地である大台ヶ原では、ニホンジカの被害等により針葉樹
 が枯死し、本種の生息環境である樹林内の落葉・蘚苔類層が消失してササ原化した。
保護対策： 大台ヶ原一帯での生息確認調査が急務である。
特記事項： 大台ヶ原の生息地一帯は吉野熊野国立公園の特別保護地区に指定され、環境
 省により森林再生事業が行われている。
文献： 56. 61.



(清水善吉)

ヒメホオヒゲコウモリ

翼手目ヒナコウモリ科

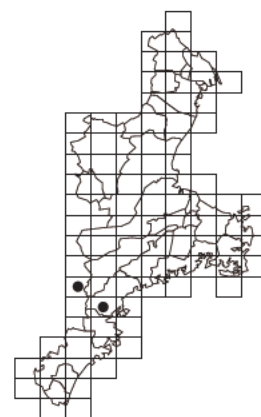
三重県：絶滅危惧IB類 (EN)

環境省：LP

Myotis ikonnikovi Ognev, 1912

旧県：情報不足 (DD)

選定理由： 県内では、紀北町と大台町で各1頭捕獲されたのみである。主な生息環境で
 ある自然度の高い森林が失われつつあり、生息基盤が脆弱である。
種の概要： 前腕長31~36 mm, 頭胴長39~55 mm, 尾長31~41 mm. 体毛は黒褐色
 からこげ茶色。飛膜は黒褐色。側膜（皮膜）は外足指の基部につく。北海道や本州北部
 では低標高地でも見られるが、本州中部以南では、主に山地から亜高山帯にかけての落
 葉広葉樹林や針広混交林に生息する。樹木のさまざまな空間（樹洞や枯死木の樹皮下な
 ど）を主なねぐらとするが、家屋、自然洞窟、隧道も利用する。樹皮下と家屋で出産哺
 育集団が確認された例もある。主として森林内で採餌する。出産時期は6月中旬~8月
 上旬で1産1子。冬眠場所や寿命についてはほとんど不明である。
分布： 国内では北海道、本州（岐阜県から石川県以北、三重県、奈良県、広島県）
 に分布。近畿以西の記録は少ない。県内では、2006年7月に紀北町の隧道で、2007年6
 月に大台町の森林内でそれぞれ1頭捕獲されたのみである。なお、奈良県ではあるが、
 三重県境に近い大台ヶ原で1969年と2004年に捕獲記録がある。
現況・減少要因： 県内の生息状況は不明である。しかし、主な生息地とされる落葉広葉
 樹林や針広混交林が伐採され、本種も影響を受けていると推測される。
保護対策： 県内における生息実態の把握が急務である。落葉広葉樹林や針広混交林を広く保全する必要がある。
特記事項： 環境省のレッドリストでは、紀伊半島の個体群を亜種シナノホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi hosonoi*
 として扱い、絶滅のおそれのある地域個体群としている。
文献： 20. 60. 61.



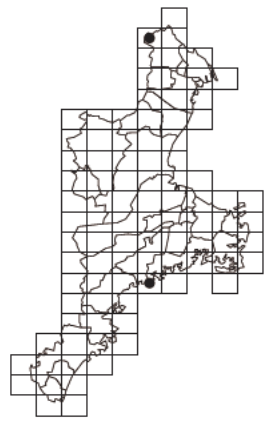
(佐野 明)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

オヒキコウモリ 翼手目オヒキコウモリ科 三重県：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省：VU
Tadarida insignis (Blyth, 1861) 旧県：情報不足 (DD)

選定理由： 現在、生息が確認されている場所は県内に1か所しかない。生息環境が特殊であることに加え、その面積は著しく狭く、生息基盤が脆弱である。

種の概要： 前腕長60～65 mm, 頭胴長82～102 mm, 尾長48～60 mm。日本に生息するコウモリ類の中で、オオコウモリ科を除いて最大種。尾膜から尾が突出している。体毛は黒褐色。耳介は大きく丸みを帯びて前方に張り出している。頭は扁平で岩の割れ目等の狭い空間に潜りこみやすい。四肢を使って巧みに歩行する。国内では、主に離島の岩の割れ目で確認されているが、鉄筋コンクリート製建築物の隙間に住む数百頭の集団が見つかったこともある。春から夏にかけて、雌を中心にした数十頭以上の集団を形成し、7～8月に出産・哺育する。しかし、冬季の主要なねぐらは見つかっておらず、冬季の生態はほとんど不明である。採餌の際は、開けた空間を高速で飛翔しながら、主にチョウ目(ガ類)を捕食する。飛翔時に、エコーロケーション(自分が発した音声の反射音をとらえて、対象までの距離や形状を知ること)のために発する音声は他のコウモリ類に比べて低く、人間の可聴音域にある。



分布： 国内では北海道、本州、四国、九州の各地で単独個体が記録されているが、宮崎県、高知県、三重県、京都府および静岡県の無人島や広島県の校舎内で集団が見つかっている。県内では、1972年12月および1978年3月にいなべ市でそれぞれ1頭が記録されており、本県には偶発的に飛来したものと思われていた。しかし、2005年に紀北町沖の無人島で集団が確認された。現在も生息が確認されているのはこの場所のみである。ここでは、5月に妊娠個体、9月に当才獣がいずれも複数頭確認されており、出産哺育している可能性が高い。また、冬季にも本種と思われる個体が、紀北町内を飛翔するのを見ることがある。

現況・減少要因： 県内唯一の生息地は国内でも数少ない本種の集団生息地であり、かつ貴重な出産哺育場所である可能性が高い。また、冬季も利用するねぐらが紀北町周辺にあると推測される。個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

保護対策： 現在、知られている生息地は無人島であり、法令によって開発が規制されている。今後も現状が維持される必要がある。また、その生息地における個体数の推移をモニタリングするとともに、県内における生息実態を把握する必要がある。

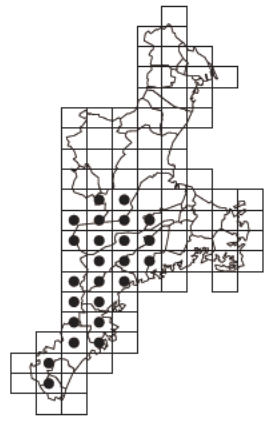
文献： 9. 10. 37. 42. 77.

(佐野 明)

ツキノワグマ 食肉目クマ科 三重県：絶滅危惧IB類 (EN) 環境省：LP
Ursus thibetanus G.Cuvier, 1823 旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

選定理由： 紀伊半島には孤立した個体群として1984年の調査では約180頭の生息が推定されており、県中部以南の山地にはその個体群の一部が分布する。三重県の生息数は1971～1980年の平均で58頭内外、1981～1985年の平均で30頭内外と推定されている。2001年以降有害捕獲も基本的に放獣され回復傾向にあるが、今後の動向には注意が必要である。

種の概要： 全身黒色で胸のところに白い三日月状紋がある。本州中部、東北産は頭胴長120～150 cm, 体重70～120 kg程度であるが、これまでに捕獲されている三重県産の多くは成獣で体重30～65 kg程度であり(50 kg内外が多い)、たとえば台高山系大台町水越谷で1994年10月に箱罠(檻)により捕獲された経産雌では、頭胴長106 cm, 尾長6 cm, 肩高50 cm, 体重31.5 kgであった。また、大台町および紀北町海山区産の成獣と推定される7頭の頭骨基底全長の平均値は219.4 mmであり、東北地方として代表される秋田県産の雄26頭の平均値254.0 mmおよび雌13頭の平均値232.0 mmと比べると、紀伊半島産個体群は小型である。食性の中心は植物質で、芽、若葉、漿果類、堅果類などを採食するが、ハチやアリなどの動物質も捕食する。冬季は大木の洞や岩穴などで越冬するが、紀伊半島では冬も活動しているようで、比較的新しい糞を見かけることがある。



分布： ヒマラヤ、東南アジア、中国、ロシア、朝鮮半島、台湾などに分布。国内では本州および四国に分布する。県内では、紀伊半島個体群は松阪市飯高町から熊野市紀和町にかけて分布し、松阪市飯高町や大台町など台高北部で

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

EW
EW
CR
EN
VU
NT
DD

は、稀な集落周辺への出没は別として、おおむね標高600~1,300 mほどの森林帯に生息するが、紀北町海山区、尾鷲市および熊野市など熊野灘に面する地域では標高400 m付近（時には300 m）の比較的平地まで生息する。また、多気町勢和や松阪市東部、津市美杉町などへのまれな出没例もあり、近年は伊勢市、度会町、南伊勢町および志摩市での聞き取りによる目撃記録もある。一方、鈴鹿山系では稀な目撃例は古くから知られるが、定着している可能性は低く、出没由来等は明らかでない（メッシュは捕獲、保護地点）。

現況・減少要因： 減少には、戦後の拡大造林期から行われてきた国有林をはじめとする冷温帯性落葉広葉樹林の伐採等による生息環境の大幅な改変ならびに継続的に行われてきた樹皮剥ぎ有害駆除を主体とした捕殺などがかわっているものと推察される。一方、1994年以降施行されている紀伊半島個体群の狩猟による捕獲禁止措置（有害捕獲は2001年以降は基本的に放獣）は保護に向けての大きな前進であるが、繁殖が一般的には2~3年に一度で1産2子と少なく、かつ、雌の性的成熟に達するのが3歳前後であることと併せると楽観はできない。

保護対策： 有害捕獲個体については放獣の基本線を遵守すること。放獣にあたっては紀伊半島個体群の遺伝子的な特性を解明するための血液等一部資料を採取するとともに、日周活動、行動圏など、保護にむけての基礎的な資料を得るためにテレメトリーを装着し、生態学的な調査を行うことが望ましい。また、斃死個体等については資料の収集保存を図る。一方、生息環境については冷温帯性落葉広葉樹林の伐採を抑制し、高標高地域の放棄的な造林地については堅果類等広葉樹の樹林に転換するなど、積極的な環境改善が必要である。

特記事項： 日本産は亜種ニホンツキノワグマ *Ursus thibetanus japonicus* (Schlegel, 1857) とされる。紀伊半島個体群は本州の中でも他の地域から孤立した個体群である。三重県指定希少野生動物種。

文献： 14. 29. 45. 46. 48. 49. 50. 51. 52. 62. 77. 79. 80. 82. 83. 88. 90. 93. 94.

(富田靖男)

ニホンカワネズミ

食虫目トガリネズミ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—

Chimarrogale platycephala (Temminck, 1842)

旧県：絶滅危惧II類 (VU)

選定理由： 生息確認地点数は10程度。出現範囲は広いが、生息環境は限定的かつ悪化している。

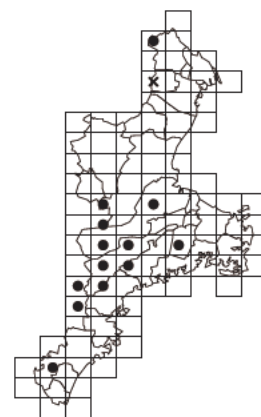
種の概要： 頭胴長111~141 mm, 尾長82~117 mm, 体重25~63 g。水中生活に適応した大型のトガリネズミ。河川上源流にすみ、昼夜活動し魚類や水生昆虫、サワガニ等を捕食する。

分布： 本州、九州に分布する日本固有種。県内では、いなべ市、菰野町、津市、松阪市、大台町、度会町、紀北町、熊野市から記録がある。

現況・減少要因： 菰野町三滝川は約80年前、松阪市堀坂川は35年前の記録であり、最近の報告はない。この2地点については、河川開発や道路工事により環境が大きく変容しており、生息は困難と思われる。

保護対策： 河川の工事にあたっては、多自然型工法の採用やカワネズミ道の設置、濁水流出防止対策を進めていく必要がある。

文献： 64.



(清水善吉)

ヒメヒミズ

食虫目モグラ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—

Dymecodon pilirostris True, 1886

旧県：絶滅危惧II類 (VU)

選定理由： 生息確認地点数は10以下。出現範囲は狭く局所分布、生息環境が限定的かつ悪化傾向にある。

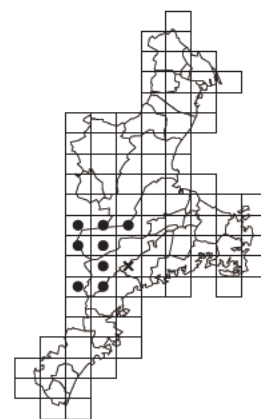
種の概要： 頭胴長70~84 mm, 尾長32~44 mm, 体重8~14.5 gの小型のモグラ。地表の落葉層、蘚苔類層中やモグラのトンネルなどを利用して行動し、ミミズや昆虫を採食している。

分布： 本州、四国、九州に分布する日本固有種。本州中部では亜高山帯以上に生息するが、北にいくほど生息地は低くなり、東北では平地にも生息する。県内では、津市、松阪市、大台町、大紀町で記録がある。

現況・減少要因： ヒミズとの競合によりもともと局所的にしか生息しない。その生息地が森林伐採や林道工事により改変され、全体的に減少傾向にある。大紀町の生息地は林道工事により消滅した。

保護対策： 林道工事や治山・砂防ダムの建設にあたっては計画前の生息確認調査を実施し、その結果を反映させたルートや位置の選定を行うべきである。

文献： 54. 61.



(清水善吉)

ノレンコウモリ

翼手目ヒナコウモリ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：VU

Myotis nattereri (Kuhl, 1817)

旧県：絶滅危惧IA (CR)

選定理由： 県内ではこれまで5か所で記録があるのみで、確認された個体数もきわめて少ない。

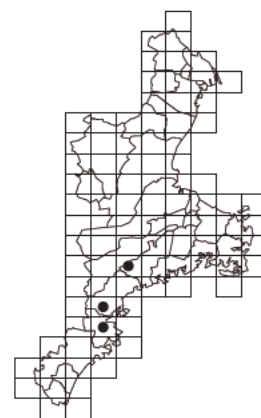
種の概要： 前腕長37~43 mm, 頭胴長44~55 mm, 尾長38~48 mm. 尾膜の後縁に細毛が列生する。耳珠は9 mm以上あって先端が尖る。洞穴性であり、自然洞窟のほか、廃坑、隧道などをねぐらとするが、家屋や樹洞も利用する。冬季の生態はほとんど不明。

分布： 日本では北海道、本州、四国、九州および口永良部島から記録がある。県内では、過去に大台町、紀北町、尾鷲市で確認されている。

現況・減少要因： これまでに見つかった5か所のねぐらでは個体数はきわめて少ない。紀北町と尾鷲市の隧道では冬眠個体も確認されているが、出産哺育場所は見つかっていない。個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

保護対策： 県内における生息実態調査を早急に実施し、利用実績のある洞穴を積極的に保全することが必要である。全国でも本種の越冬地として知られる場所はきわめて少なく、大台町と尾鷲市の2か所の隧道は貴重な越冬場所として保全を要す。

文献： 8. 34. 36. 53. 59.



(佐野 明)

ニホンウサギコウモリ

翼手目ヒナコウモリ科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：

Plecotus sacrimontis G.M. Allen, 1908

旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

選定理由： 県内ではこれまで5か所で目撃例があるのみで、個体数もきわめて少ない。

種の概要： 前腕長37~44 mm, 頭胴長42~63 mm, 尾長41~58 mm. ねぐらとして自然洞窟、廃坑、隧道のほか、家屋や樹洞も利用する。森林（主に落葉広葉樹林や針広混交林）に生息する。

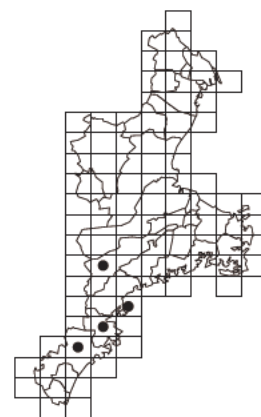
分布： 日本固有種。北海道、本州、四国および九州から知られる。県内では、2001年に紀北町の隧道で初確認された。その後、尾鷲市、大台町、熊野市、さらに紀北町の別の隧道でも目撃されたが、個体数はきわめて少ない。出産哺育場所は見つかっていない。

現況・減少要因： 県内の生息状況は不明である。しかし、主な生息地とされる落葉広葉樹林が伐採され、本種も影響を受けていると推測される。

保護対策： 県内における生息実態の把握が急務である。自然度の高い森林を広く残しつつ、定期的に利用する洞穴が発見された場合には、その保全が必要である。

特記事項： 近年の分子系統学的研究により、本種は *Plecotus auritus* とは別種の日本固有種であることがわかった。

文献： 6. 31. 66. 96.



(佐野 明)

ニホンモモンガ

齧歯目リス科

三重県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：

Pteromys momonga Temminck, 1844

旧県：絶滅危惧IB類 (EN)

選定理由： 生息確認地点数は10以下、本種に関する情報量は極端に少ない。

種の概要： 頭胴長140~200 mm, 尾長100~140 mm, 体重150~220 g, 目が大きく、前肢と後肢の間に皮膜があり、樹間を滑空しながら移動する。

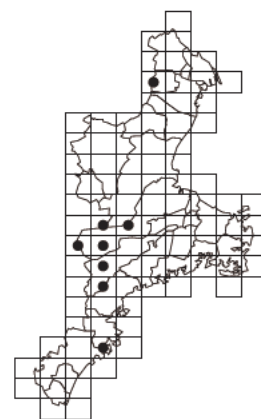
分布： 本州、四国、九州に分布する日本固有種。四国、九州ではまれなようである。県内では菰野町、津市、松阪市、大台町および熊野市で記録がある。

現況・減少要因： 山地帯から亜高山帯の森林に生息するとされているが、分布状況を十分に把握できているとは言い難い。本種の移動様式は樹幹間の滑空を基本とすること、また、巣穴を形成するのに十分な太さの樹木が必要なことから、森林の伐採は本種にとって大きな脅威となっていると思われる。

保護対策： 森林施業に際しては森林間を結ぶグリーンベルトを残していく等の配慮も必要である。また、本種の生活には樹洞が不可欠であるから、大木の保存も重要である。

特記事項： 鈴鹿山系霊仙岳の滋賀県側においても生息が確認されている。

文献： 3. 55. 61. 65.



(清水善吉)

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

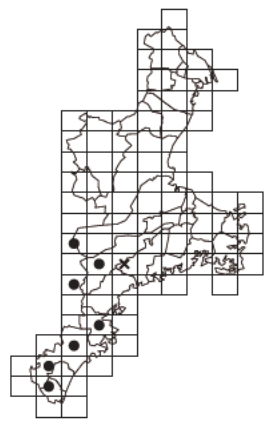
NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
EW
EN
VU
NT
DD

ヤチネズミ 三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU) 環境省：
Eothenomys andersoni (Thomas, 1905)

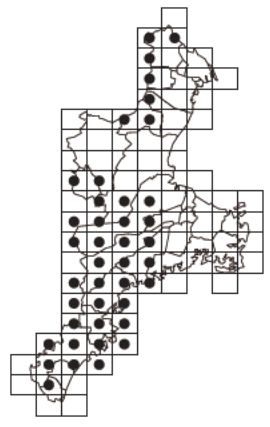
選定理由： 生息確認地点数は10程度。出現範囲が狭く局所分布、生息環境は限定的かつ悪化傾向にある。
種の概要： 頭胴長79～127 mm, 尾長45～78 mm, 体重18～60 gで、全体にずんぐりとした印象のネズミ。岩場、ガレ場等の隙間やトンネルなどを利用して行動し、植食性でまれにスギの樹皮等を齧ることもある。
分布： 本州の中部、北陸以北と紀伊半島南部に分布する日本固有種。本州中部では標高400 m前後から高山帯まで、東北や紀伊半島では平地にも生息する。県内では、松阪市、大台町、大紀町、尾鷲市、熊野市、御浜町、紀宝町で生息の記録がある。
現況・減少要因： 谷沿いの岩場・ガレ場に限定的に生息しているため、いずれの確認地点でも生息範囲は狭く、密度も低い。大紀町の生息地は林道工事等により消滅した可能性が高い。
保護対策： 林道工事や治山・砂防ダムの建設にあたっては計画前の生息確認調査を実施し、その結果を反映させたルートや位置の選定を行うべきである。
文献： 57. 61.



(清水善吉)

カモシカ 三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：準絶滅危惧 (NT) 環境省：
Capricornis crispus (Temminck, 1845)

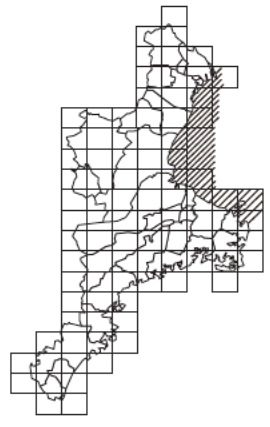
選定理由： 孤立した地域個体群である。特に鈴鹿山系個体群は規模が小さく、ニホンジカの増加に伴い主要生息場所が減少し、個体数密度が低下していることからVUにランクアップされた。
種の概要： 頭胴長70～85 cm, 尾長7～11 cm, 肩高70～75 cm, 体重30～45 kg。雌雄とも円筒形角質の永久的な角が一对あり、最長15 cmほどになる。秋に交尾、翌5～6月出産。
分布： 日本固有種で、鈴鹿山系個体群は、いなべ市から亀山市に、また、紀伊山地個体群は、名張市滝の原を北限に、津市から紀宝町に分布し、両個体群間の交流はない。
現況・減少要因： 鈴鹿山地、紀伊山地のいずれの地域も山麓部への面的な分布の広がりはあるものの、保護区など本来の主要生息地域で著しく減少しており、県全域的にみた個体数も減少傾向にある。パラボックス感染症以外に、ニホンジカとの競合が大きくかかわっている。
保護対策： 適切な森林施業によるカモシカ生息環境の改善、森林荒廃の主要因ともなっているニホンジカの個体数調整、山麓への出現個体の保護管理、継続的調査などが必要である。
特記事項： 1955年に特別天然記念物に指定。
文献： 22. 23. 24. 25. 26. 61. 69. 70. 77. 80. 82. 83. 85. 87. 88. 90. 94



(富田靖男)

スナメリ 三重県：絶滅危惧II類 (VU)
旧県：絶滅危惧II類 (VU) 環境省：
Neophocaena asiaeorientalis (Pilleri & Gühr, 1972)

選定理由： 本種の生息域は人間の生産活動が活発におこなわれている沿岸域であり、環境汚染等の影響も受けやすく生息数の減少が懸念される。
種の概要： 伊勢湾・三河湾に周年生息する唯一の鯨類である。体長170～200 cm, 体重60～70 kg。伊勢湾周辺での繁殖期は3～7月で、妊娠期間は約1年である。出産は1産1子で、出生体長は75～85 cm, 体重は約8 kgである。新生児は母乳で育ち生後3～5か月で餌を食べ始め、約1年は母乳と併食である。エサは甲殻類、頭足類、小型魚類である。歯による年齢査定で最高年齢は28年である。
分布： 日本国内では仙台湾から東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海から響灘、橘湾から有明海、大村湾の5系群が知られている。
現況・減少要因： 伊勢湾・三河湾の生息数は2003年の調査で約3,000頭と推定されている。直近の3年間は伊勢湾西岸で毎年50頭前後の死亡漂着と混獲が確認されている。
保護対策： 音響回避ピンガー等により、混獲を防止することが必要である。
文献： 11. 12. 13. 27. 72. 95.



(古田正美)

コキクガシラコウモリ

翼手目キクガシラコウモリ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：

Rhinolophus cornutus Temminck, 1835

旧県：絶滅危惧II類 (VU)

選定理由： 現在の分布は広いが、生息洞穴が破壊され、採餌場となる森林も伐採されて、生息環境が悪化している。

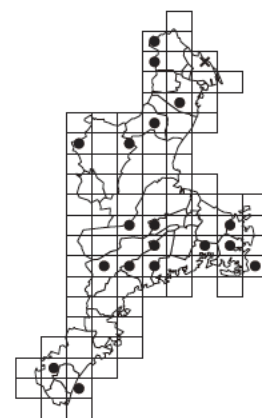
種の概要： 前腕長36~44 mm, 頭胴長35~56 mm, 尾長16~30 mm. 頭部前面に鼻葉と呼ばれる肉質の突起を持つ。洞穴性で、自然洞窟のほか、廃坑、隧道などをねぐらとする。

分布： 日本固有種。北海道、本州、四国、九州と沖永良部島以北の島嶼に広く分布。県内の山地に広く分布し、これまで約25か所のねぐらが記録されているが、出産哺育場所は確認されていない。

現況・減少要因： 開発により、県内各地で本種の生息洞穴が破壊されつつある。安全対策のため、廃坑などの入口が閉塞され、利用できなくなった場所もある。

保護対策： 生息洞がこれ以上破壊されないよう保全し、主要な生息場所では個体数の推移をモニタリングする必要がある。安全対策を講じる場合は、コウモリは通過できる柵を設置することが望ましい。

文献： 33, 40, 67.



(佐野 明)

ユビナガコウモリ

翼手目ヒナコウモリ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

旧県：準絶滅危惧 (NT)

選定理由： 現在の分布は広いが、ねぐらとなる洞穴が破壊され、生息環境が悪化している。

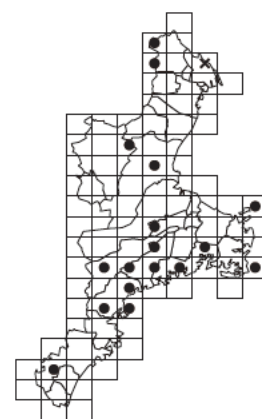
種の概要： 前腕長45~51 mm, 頭胴長59~69 mm, 尾長51~57 mm. 前肢の第3指が長いので、翼は狭長型。洞穴性であり、自然洞窟のほか、廃坑、防空壕、隧道等をねぐらとする。

分布： 日本では本州、四国、九州、佐渡、隠岐、福江島、対馬、屋久島に分布。県内では、海岸部から山地にかけて広く分布し、約20か所のねぐらが確認されているが、出産哺育集団は確認されていない。

現況・減少要因： 開発により、県内でも生息洞穴が破壊されている。安全対策として、廃坑の入口が閉塞され、利用できなくなった場所もある。

保護対策： 生息洞がこれ以上破壊されないよう保全し、主要な生息場所では個体数の推移をモニタリングする必要がある。安全対策を講じる場合は、コウモリは通過できる柵（本種の場合、格子状の柵ではなく、フェンスの上に鉄条網を張り、上部に広い空間を開けたハーフゲートにすべき）を設置することが望ましい。

文献： 7, 33, 35, 67, 71.



(佐野 明)

テングコウモリ

翼手目ヒナコウモリ科

三重県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：

Murina hilgendorfi (Peters, 1880)

旧県：絶滅危惧II類 (VU)

選定理由： 県内に比較的広く分布するが、確認された個体数は少ない。

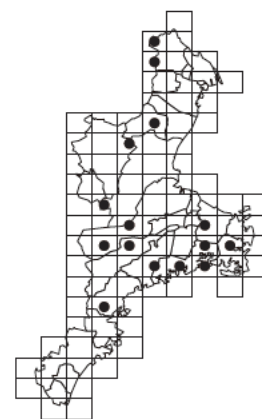
種の概要： 前腕長40~46 mm, 頭胴長47~70 mm, 尾長32~47 mm. 鼻は先端が二つに分かれて左右に突出している。自然洞窟や隧道、家屋、枯葉の中など多様な場所をねぐらとして利用する。主として森林内で採餌し、地表を徘徊する昆虫も捕食する。

分布： 日本では北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、いなべ市から尾鷲市にかけて約20か所で確認されている。

現況・減少要因： 三重県ではほとんどが洞穴での確認であり、個体数は多くない。単独で発見されることが多く、4頭以上が同時に確認された例はない。出産哺育場所は確認されていない。個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

保護対策： 県内における生息実態の把握が急務である。自然度の高い森林を広く残しつつ、定期的に利用する洞穴が発見された場合には、その保全が必要である。

文献： 15, 19, 43, 44, 67.



(佐野 明)

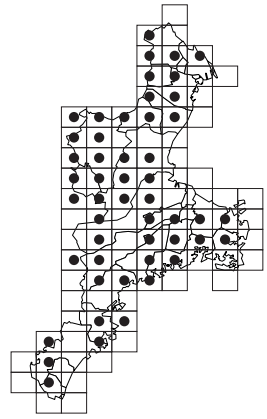
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物

ニホンリス 齧歯目リス科 三重県：準絶滅危惧 (NT) 環境省：
Sciurus lis Temminck, 1844 旧県：準絶滅危惧 (NT)

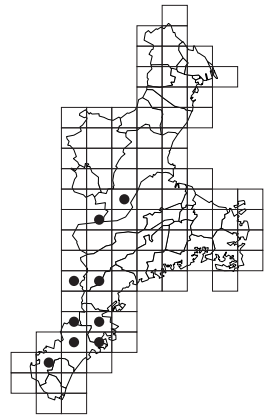
選定理由： アカマツ・広葉樹二次林を中心に、山林には比較的広く分布しているが、近年生息地の直接的な減少および生息環境の悪化が進行しており、個体数が減少している。
種の概要： 頭胴長20 cm内外、尾長16 cm内外。背面は褐色系で腹部は白い。昼行性で、芽、葉、花やマツ、クルミなどの果実類を好み、昆虫類なども食べる。1産2~6子。
分布： 日本固有種。県内では北勢から紀州まで広域的に分布しているが、生息地は丘陵地・低山地のアカマツ・広葉樹二次林および山地の自然林など、パッチ状である。
現況・減少要因： 既存資料等では広域的に記録されているが、なかには住宅や工業団地、スポーツ・レジャー施設、道路建設などにより環境が改変された所も多くみられる。また、松枯れ現象やニホンジカの樹皮剥皮などによる森林の荒廃も減少要因となっている。
保護対策： アカマツ・広葉樹二次林をはじめとする山林開発の抑止ならびに長期的な保全、管理が必要である。また、放棄的な造林地の広葉樹林化など、環境改変が必要である。
文献： 4. 21. 28. 32. 47. 50. 61. 68. 69. 70. 74. 75. 76. 77. 78. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 88. 89. 90. 91. 92.



(富田靖男)

ヤマネ 齧歯目ヤマネ科 三重県：準絶滅危惧 (NT) 環境省：
Glirulus japonicus (Schinz, 1845) 旧県：絶滅危惧II類 (VU)

選定理由： 生息確認地点数は12、森林に依存する傾向が強く、生息環境は減少している。
種の概要： 頭胴長68~84 mm、尾長44~54 mm、体重14~40 g、尾は扁平でふさふさとした毛が生えている。夜行性で、生活の大部分を樹上で過ごし、樹洞内に樹皮を集めて丸い巣をつくる。12月~3月頃まで冬眠する。
分布： 本州、四国、九州、隠岐島後に分布する日本固有種。低山帯から亜高山帯の森林に生息する。県内では、津市、松阪市、大台町、尾鷲市、熊野市で生息の記録がある。
現況・減少要因： 鈴鹿山地や布引山地からの生息記録はなく、県内では雲出川以南の森林に生息していると思われる。本種の採食や繁殖の大部分が樹上で行われることを考えると、森林の伐採は本種にとって大きな脅威となっていると推定される。
保護対策： 生息地を分断する道路等の建設にあたっては、本種が樹上性であることを考慮した対策をたて、移動ルートを確認する必要がある。
特記事項： 国指定天然記念物である。
文献： 58. 61. 63.



(清水善吉)

コテングコウモリ 翼手目ヒナコウモリ科 三重県：情報不足 (DD) 環境省：
Murina ussuriensis Ognev, 1913 旧県：情報不足 (DD)

津市美杉町で1948年、1974年、1998年に各1頭が確認されているにすぎない。(文献：67. 77.)

(佐野 明)

ヤマコウモリ 翼手目ヒナコウモリ科 三重県：情報不足 (DD) 環境省：VU
Nyctalus aviator Thomas, 1911 旧県：情報不足 (DD)

2013年に、津市でクロマツの樹洞に生息する集団が確認された例があるのみである。(文献：39.)

(佐野 明)

ヒナコウモリ 翼手目ヒナコウモリ科 三重県：情報不足 (DD) 環境省：
Vespertilio sinensis (Peters, 1880) 旧県：情報不足 (DD)

2004年に大台町、2010年に津市といなべ市で各1頭確認されているにすぎない。(文献：38. 41.)

(佐野 明)

文 献

1. 阿部 永. 2000. 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 279 pp.
2. 阿部 永 (監修). 2005. 日本の哺乳類 [改訂版]. 東海大学出版会, 秦野, 206 pp.
3. 阿部勇治. 2014. 滋賀県犬神郡多賀町におけるニホンモモンガ *Pteromys momonga* の記録. 滋賀県自然環境研究会誌, 12: 73-76.
4. 秋田一貫. 1955. 三重県伊賀上野の哺乳類. 三重生物, 6: 28-32.
5. 土井幹夫. 1889. 海驢の件質問. 質疑応答. 大日本水産会報告. 82. [三重県史. 別編. 自然 (1996年). p.287-290に収録].
6. Fukui, D. 2009. *Plecotus sacrimontis* G.M. Allen, 1908. In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, Iwasa M.A. and T.Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp. 86-87. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
7. Funakoshi, K. 1986. Maternal care and postnatal development in the Japanese long-fingered bat, *Miniopterus schreibersi fuliginosus*. Journal of the Mammalogical Society of Japan, 11: 15-26.
8. Funakoshi, K. 1991. Reproductive ecology and social dynamics in nursery colonies of the Natterer's bat *Myotis nattereri bombinus*. Journal of the Mammalogical Society of Japan, 15: 15-26
9. 船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治. 1999. 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所, 個体群構成および活動について. 哺乳類科学, 39: 23-33.
10. 船越公威・山本貴仁. 2001. 高知県蒲葵島からのオヒキコウモリ *Tadarida insignis* 生息地の新記録. 哺乳類科学, 41: 87-92.
11. 古田正美. 1997. 伊勢湾周辺における海産哺乳類のストランディングと水族館の活動. (国立科学博物館・東京大学海洋研究所「海棲哺乳類ストランディングシンポジウム」講演要旨集, pp. 8-9. 国立科学博物館・東京大学海洋研究所, 東京・柏.
12. 古田正美. 2003. 水族館におけるスナメリの飼育・生態研究. 東京大学海洋研究所共同研究集会シンポジウム「スナメリの生態と保全」講演要旨集, p. 5. 東京大学海洋研究所, 柏.
13. Furuta, M., Kataoka, T., Sekido, M., Yamamoto, K., Tsukada, O. and Yamashita, T. 1989. Growth of finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829) from the Ise Bay Central Japan. Annual Report of Toba Aquarium, 1: 89-102.
14. 花井正光. 1983. 年齢, 頭骨調査 (年齢調査と性的二型について). 秋田県のツキノワグマ ツキノワグマ総合調査報告書, pp. 57-132. 秋田県林務部, 秋田.
15. Ishida, M., Sakamoto, Y., Hashimoto, A. and Matsumura, S. 2012. Population dynamics and long-term survival of Hilgendorf's tube-nosed bat *Murina hilgendorfi* in the Akiyoshi-Dai Karst Area, Yamaguchi, Japan. Mammal Study, 37: 249-253.
16. Isono, K. and Inoue, K. 2009. *Zalophus japonicus* (Peter, 1866). In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.288-289. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
17. 伊藤徹魯. 1994. ニホンアシカの復元にむけて (7) 古文献の「アシカ」の同定. 海洋と生物, 16: 215-224.
18. 伊藤徹魯・中村一恵. 1994. ニホンアシカの復元にむけて(9) ニホンアシカの分布と復元. 海洋と生物, 16: 373-393.
19. Kawai, K. 2009. *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880). In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.115-117. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
20. Kawai, K. 2009. *Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912. In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.98-100. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
21. 増井憲一. 1976. 藤原岳周辺 (鈴鹿山脈北部および養老山地の一部) における野生動物 (哺乳類) の記録. 藤原岳自然科学館館報, 2: 3-48.
22. 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会. 2000. 鈴鹿山地カモシカ保護地域特別調査報告書. 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会, 津・大津, 134 pp.
23. 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会. 2008. 平成18・19年度鈴鹿山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書. 三重県教育委員会・滋賀県教育委員会, 津・大津, 107 pp.
24. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会. 2002. 紀伊山地カモシカ保護地域特別調査報告書. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会, 津・奈良・和歌山, 149 pp.
25. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会. 2010. 紀伊山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書平成20・21年度. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会, 津・奈良・和歌山, 219 pp.
26. 村岡一幸. 2007. 天然記念物カモシカの現状. 自然誌だより, 73: 4-5.
27. 小川奈津子・吉田英可. 2014. 日本におけるスナメリの個体数推定. 海洋と生物, 211: 182-190.
28. 岡田弥一郎・角田 保. 1963. 鈴鹿山脈の哺乳類. 鈴鹿山脈自然科学調査報告書, pp. 49-64. 三重県自然科学研究会, 津.
29. 乙部 宏. 2002. 県境付近のツキノワグマ目撃記録. 自然誌だより, 51: 6.
30. 櫻井平八. 1888. 海獣諸件. 質疑応答. 大日本水産会報告. 74. [三重県史. 別編. 自然 (1996年). p.286-287に収録].
31. 佐野 明. 2001. 三重県におけるウサギコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物, 6: 23.

哺乳類

鳥 類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝 類

甲殻類

その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

32. 佐野 明. 2002. 三重県におけるニホンリス*Sciurus lis*の記録. 自然誌だより, 52: 4.
33. 佐野 明. 2003. コウモリと戦争遺跡. ワイルドライフ・フォーラム, 8: 93-99.
34. 佐野 明. 2003. 三重県におけるノレンコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物, 7: 20.
35. Sano, A. 2009. *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835). In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.111-112. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
36. Sano, A. 2009. *Myotis nattereri* (Kuhl, 1818). In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.104-105. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
37. Sano, A. 2009. *Tadarida insignis* (Blyth, 1861). In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.124-125. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
38. 佐野 明. 2013. 三重県北勢地方におけるヒナコウモリ*Vespertilio sinensis*の初記録. 藤原岳自然科学館館報, 36: 1-3.
39. 佐野 明. 2014. 三重県で初めて確認されたヤマコウモリとそのねぐら. 三重自然誌, 14: 29-30.
40. Sano, A. and Armstrong, K.N. 2009. *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1835. In (S.D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M.A. Iwasa and T. Saitoh, eds.) The Wild Mammals of Japan, pp.60-61. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
41. 佐野 明・大西かおり. 2005. 三重県におけるヒナコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物, 8: 1-2.
42. 佐野 明・清水善吉・佐野順子・山本輝正. 2006. 紀伊半島からのオヒキコウモリ生息地の初記録. 紀伊半島の野生動物, 8: 3-5.
43. 佐藤顕義・勝田節子. 2007. 天竜川水系で確認したテングコウモリ*Murina leucogaster*の繁殖と周年動態. コウモリ通信, 20: 2-5.
44. 佐藤顕義・勝田節子・石原 誠・山本輝正. 2012. テングコウモリの糞中から見出された地表徘徊性昆虫. コウモリ通信, 24: 7-8.
45. 澤山 晋. 2004. 小岐須溪谷で熊と遭遇したこと. 自然誌だより, 60: 7.
46. 柴田叡弐・小船武司. 1984. 紀伊半島におけるニホンツキノワグマについて. 森林防疫, 33: 175-180.
47. 島地岩根. 1979. 三重大学演習林の哺乳類・爬虫類・両生類・淡水魚類. 第27回日本林学会中部支部大会論文集: 85-86.
48. 清水善吉. 1990. 三重県の哺乳類情報 1. 自然誌だより, 6: 5-6.
49. 清水善吉. 1992. 高見山地で唯一のツキノワグマ捕獲記録. 自然誌だより, 11: 2.
50. 清水善吉. 2004. 嬉野町の哺乳類. 嬉野史自然編, pp.77-86+179-200. 嬉野町役場総務課嬉野町史編纂室, 嬉野.
51. 清水善吉. 2004. 久居市でもツキノワグマ 生き返った剥製標本. 自然誌だより, 60: 1.
52. 清水善吉. 2004. 高見山地でのツキノワグマ繁殖事例. 自然誌だより, 59: 1.
53. 清水善吉. 2004. 尾鷲で冬眠中のノレンコウモリを記録. 三重自然誌, 8/9/10: 76.
54. 清水善吉. 2006. ヒメヒミズ. 三重県レッドデータブック2005 動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), p. 54. (財) 三重県環境保全事業団, 津.
55. 清水善吉. 2006. ニホンモモンガ. 三重県レッドデータブック2005 動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), p. 52. (財) 三重県環境保全事業団, 津.
56. 清水善吉. 2006. シントウトガリネズミ. 三重県レッドデータブック2005 動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), p. 48. (財) 三重県環境保全事業団, 津.
57. 清水善吉. 2006. ヤチネズミ. 三重県レッドデータブック2005 動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), p. 58. (財) 三重県環境保全事業団, 津.
58. 清水善吉. 2006. ヤマネ. 三重県レッドデータブック2005 動物 (三重県環境森林部自然環境室 編), p. 59. (財) 三重県環境保全事業団, 津.
59. 清水善吉. 2007. 紀北町でノレンコウモリを記録. 三重自然誌, 11: 128.
60. 清水善吉. 2007. 三重県におけるヒメホオヒゲコウモリの初記録. 三重自然誌, 11: 127-128.
61. 清水善吉. 2009. 紀伊半島大台ヶ原一帯の哺乳類相. 三重自然誌, 12: 2-21.
62. 清水善吉. 2010. 大杉谷で熊に出会う. 自然誌だより, 86: 5.
63. 清水善吉. 2014. 家屋に侵入したヤマネの記録. 三重自然誌, 14: 69-71.
64. 清水善吉. 2014. 三重県におけるカワネズミの分布状況. 三重自然誌, 14: 65-68.
65. 清水善吉. 2014. 三重県におけるニホンモモンガの分布状況. 三重自然誌, 14: 72-75.
66. 清水善吉・佐野 明. 2007. 三重県におけるウサギコウモリの新たな分布記録. 三重自然誌, 11: 129-130.
67. 清水善吉・寺西敏夫・佐野 明・富田靖男・前田喜四雄. 2004. 三重県のコウモリ洞と生息記録. 三重自然誌, 8/9/10: 77-90.
68. 清水善吉・富田靖男. 1991. 哺乳類. 菰野町史自然編, pp. 311-325. 菰野町, 菰野.
69. 清水善吉・富田靖男. 2008. 鈴鹿市の哺乳類. 鈴鹿市の自然 鈴鹿市自然環境調査報告書 (鈴鹿市環境部環境政策課 編), pp. 301-313. 鈴鹿市環境部環境政策課, 鈴鹿.
70. 清水善吉・富田靖男. 2010. 亀山市の哺乳類相. 亀山市史 自然編, pp. 499-528. 亀山市, 亀山.
71. 清水善吉・梅村有美. 2012. 神島の哺乳類, 爬虫類および両生類. 三重自然誌, 13: 9-17.
72. 白木原国雄. 2003. 日本におけるスナメリの分布. 月刊海洋, 35: 538-543.
73. 田代安定. 1877. 明治十年紀州紀行. [三重県史. 別編. 自然 (1996年) p.227-240に収録].
74. 寺西敏夫. 1983. 藤原岳自然科学館における哺乳類資料記録. 藤原岳自然科学館館報, 5: 54-59.

75. 寺西敏夫. 1986. 多度町南部丘陵地における脊椎動物相. 養老山地南部丘陵地 (古野地区) 自然科学報告書, pp. 15-49. 北勢自然科学研究会, 桑名.
76. 寺西敏夫. 1989. 1988年哺乳類資料記録. 藤原岳自然科学館館報, 11: 52-55.
77. 富田靖男. 1979. 三重県の哺乳動物相. 三重県立博物館研究報告 自然科学, 1: 5-68.
78. 富田靖男. 1986. 哺乳類 (哺乳綱). 大宮町史自然編, pp.494-512. 大宮町, 大宮.
79. 富田靖男. 1989. 三重県におけるツキノワグマの分布ならびに捕獲数の推移について. ツキノワグマ生息状況調査報告書, 三重県農林水産部林業事務局, 津, 24 pp.
80. 富田靖男. 1990. 故郷の動物. 三重県良書出版会, 津, 253 pp.
81. 富田靖男. 1992. 動物相の概観. 多気町史, pp.51-70. 多気町, 多気.
82. 富田靖男. 1994. 動物. 宮川村史, pp.65-155. 宮川村, 宮川.
83. 富田靖男. 1994. 三重県の陸産哺乳類. 三重の生物 (三重生物教育会 編), pp.117-132. 三重生物教育会, 津.
84. 富田靖男. 1995. 哺乳類. 多度町史 自然, pp. 633-648. 多度町, 多度.
85. 富田靖男. 2000. 三重県の陸産哺乳類 (II). 三重県環境保全事業団研究報告, 6: 23-47.
86. 富田靖男. 2004. 哺乳類. 紀宝町誌, pp. 20-23. 紀宝町, 紀宝.
87. 富田靖男. 2010. 紀伊半島カモシカ個体群の分布の動向. 自然誌だより, 86: 7-8.
88. 富田靖男・島地岩根. 1982. 尾鷲市および周辺地域の哺乳動物相. 尾鷲地域野生生物調査報告書, pp. 85-141. 尾鷲地域野生生物調査会・三重県自然科学研究会, 尾鷲・津.
89. 富田靖男・清水善吉. 1990. 哺乳類. 四日市市史 史料編自然, pp. 272-281. 四日市市環境部環境保全課, 四日市.
90. 富田靖男・富田 傑. 2001. 勢和の動物. 勢和村史, pp. 54-177. 勢和村, 勢和.
91. 富田靖男・富田 傑. 2002. 哺乳類. 紀勢町史自然編, pp. 105-135. 紀勢町, 紀勢.
92. 富田靖男・富田 傑. 2004. 哺乳動物相. 上野市史自然編, pp.468-515. 上野市, 上野.
93. 若林郁夫. 2009. 志摩半島における2008年のツキノワグマ目撃記録. 三重の生きものだより, 40: 8-11.
94. 山下善平・樋口行雄・山本和彦・増井憲一・須川恒・大迫義人・真崎 健・吉田浩美. 1982. 大台山系国設鳥獣保護区保全管理計画策定基礎調査報告書. 三重県農林水産部林業事務局, 津, 58 pp.
95. Yoshida, H., Yoshioka, M., Shirakihara, M. and Chow, S. 2001. Population structure of finless porpoise (*Neophocaena phocaenoides*) in coastal water of Japan based on mitochondrial DNA sequences. *Journal of Mammalogy*, 82: 123-130.
96. 吉倉智子・村田浩一・三宅 隆・石原 誠・中川雄三・上條隆志. 2009. ニホンウサギコウモリの出産保育コロニーの構造と繁殖特性. *哺乳類科学*, 49: 225-235.

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD